中世ロマンにおける一騎討ち描写について

植　田　裕　志

フランス中世の武勲詩やロマン（韻文・散文物語）の一騎討ちの描写は，いつも大した違いはなく，同じ一つの作品で，さらには様々な作品を通しても同じことの単調な繰り返しでしかないように見える。一騎討ちの戦いは神明裁判のような決闘はもちろんのこと，野戦や攻囲戦，騎馬槍試合といったある程度組織だった集団戦のひとこまとしてもしばしば描かれる(1)。騎士はまず敵に向って馬を走らせて槍で戦い，それで勝負がつけば戦いは終わるが，勝負がつかないままに槍が折れ，あるいは落馬すれば，今度は地面に立って剣で戦う。描写が単調であるというのは，戦いの一連の手順がいかにも形式的で，さらには出てくる文句も単調な繰り返しに過ぎないように見えるということである。何か独特の戦法を得意とする騎士もいなければ，独創的な描写の腕を見せる作家もいない。10音綴母音押韻（assonance）の武勲詩でも，8音綴平韻の韻文ロマンでも，また散文ロマンでも，韻律の違いがあるに過ぎず，また12世紀初めの武勲詩と15世紀の散文ロマンを比べても，時代の違いで武具に関する用語やフランス語そのものの多少の違いがあるに過ぎないように見える。

こうした単調さの理由としてすぐ思い浮かぶのは，まず中世を通じて現実の戦闘方法にあまり変化がなかったからというものである。ついでロマンの作者などは学僧（clerc）であって現実の戦闘をよく知らなかったし，また現実の戦闘にあまり関心がなかったということも考えられる(2)。さらには中世の作者には独創性という観念や，あるいは現実をそのままに描写しようとする素朴なリアリズムなどは無縁のものであったということも考えられる。端的に，歌詞や読み物の作者たちはただ聴衆や読者の好みに従うために，彼らの物語の中に多くの戦闘の場面を設けたのだと言って片づけてしまうことができるかも知れない。

しかし少なくとも文学研究の立場からする限り，中世作品の単調な戦闘描写について，こうした理由を並べ立てただけでは満足できない。武勲詩を口誦詩として研究する道を開いたリシュネルは，武勲詩の詩節（laisse）構成と共に，槍による攻撃にみられる定型句（formule）表現に着目した(3)。このモチーフが「馬に拍車を当てる」ことから，「敵を落馬させる」までの7つの要素からなり，それぞれの要素が武勲詩作品に共通の定型句をもとに構成されていることを指摘したのである。リシュネルの見方の出発点にあったのは，かつてシチリアーノが叙事詩の起源について述べた時の言い回しを裏返して，槍による攻撃のモチーフが「戦闘の技法よりもむしろ詩の技法に属するものである」と考えることにあった。

また，近年，新たに『ランスロ』（*Lancelot*）の校訂本を出したミーシャも，この13世紀の大

部の散文作品を研究する上での今日のレヴェルでの出発点となるべき諸点を指摘する中で,『ランスロ』の一騎討ちの描写が，語彙と統辞の点でステレオタイプ化した表現からできている点に注目している[4]。そこでは，『ランスロ』の戦闘描写がリシュネルとは異なるものの，やはり７つの局面に分類され，ステレオタイプ化している表現の例が並べられているが，同時にクレチヤン・ド・トロワ（Chrétien de Troyes）の作品や『ペルレスヴォー』（*Perlesvaus*）の場合との対照もなされている。

従って，中世作品の単調な一騎討ちを様式表現として見直すことは興味深いテーマであると思われる。たとえば，一方でこうした文学的様式の成立とその伝承を実際の歴史の背景を視野に入れて見直すと共に，他方では伝統的様式の枠内でどのような変化なり，工夫があったのかを調べることができよう。本稿では一騎討ち描写の出発点となる初期武勲詩と，それに続く韻文・散文ロマンの作品の数点をとりあげて，このような視点から明らかになる幾つかの点を指摘したいと思う。

1　一騎討ち描写のパターン

一騎討ち描写のパターンについて改めてリシュネルの図式とミーシャの図式を比べてみよう。

リシュネルの図式（武勲詩について）[5]

1. 馬に拍車を当てる
2. 槍を振る
3. 打つ
4. 敵の盾を破る
5. 敵の鎖かたびらを破る
6. 敵の体に槍を突き通す，あるいは槍はただ敵の体をかすめるだけに終わる
7. 敵を落馬させる，多くの場合に敵を殺して

ミーシャの分類（ロマンについて）[6]

1. 突撃（「槍や盾を構える」,「馬に拍車を当てる」，など）
2. 戦い（「相手の盾を槍で突く」など）
3. 負傷（「相手の背骨を折る」,「血が飛び散る」，など）
4. 武具の破損（「槍が折れる」,「鎖かたびらを破る」，など）
5. 成功（「戦いに勝つ」）
6. 落馬（「相手を馬から地面に落とす」，など）
7. 相手の死（「殺して地面に落とす」,「頭を割る」，など）

ミーシャの図式は，本人自ら言っているように，リシュネルの図式を参考にしているから，二つの図式はよく似た形をとっている。しかし武勲詩とロマンの違いがあるからであろう，リシュネルのようにはならなかった点がある。すなわち，リシュネルの図式では一つの要素ごとに一つの定型句を並べれば，そのまま一つの一騎討ち描写となるのに対して，ミーシャの分類は一つの局面ごとにそれに関係する表現を集めたものになっている。また両者の図式では共に剣での戦いによる段階が入っていない。そこで一騎討ち描写のより包括的なパターンの図式は，一方で戦闘の始まりから終わりまでの一連の戦闘の段階と，もう一方では戦闘行為そのものやそれに合わせて言及される諸要素とに分けて考えるべきであると思われる。

(1)戦闘の手順

1. 突撃
2. 槍での戦い
3. 落馬
4. 剣での戦い

(2)表現の要素

1. 突撃（「槍や盾を構える」，「馬に拍車を当てる」，など）
2. 攻撃（「相手の盾を槍で突く」など）
3. 武具の破損（「槍が折れる」，「鎖かたびらを破る」，など）
4. 負傷・死（「相手の背骨を折る」，「血が飛び散る」「殺して地面に落とす」，など）
5. 騎士・馬・武具についての形容（「鋭利で輝く剣」など）
6. 激突時の衝撃の形容（「雷鳴のような」など）
7. 騎士の疲れ　　など

表現の要素の個々の類型的文句についてはある程度ミーシャのリストに挙げられているから，ここでは戦闘の手順のパターンについてさらに補足しておきたい。その一つは，戦闘場面では単に戦闘行為そのものばかりでなく，その前後途中で相手を威嚇したり，勝利を勝ち誇ったりする言葉が発せられたり，また長く続く剣での戦いの途中では両者が休息する場合もあるということである。またもう一つは，槍による戦いの場面であれ，剣による戦いの場面であれ，「互いに」という言葉でしばしば強調されるように両者の動きを合わせて描写するか，そうでなければ時には同時であるはずの打ち合いも一人ずつ順番に一回ずつ描写するパターンが基本になっていることである。

2 騎士の戦い

こうした槍と剣による一騎討ち描写のパターンはだいたいのところすでに初期武勲詩において出来上がっていたし，ロマンとしては最初期の古代ものロマン (romans antiques) においてもそうであった。

武勲詩にしても古代ものロマンにしても戦闘場面は多く集団戦であって，そこには矢や投げ槍が飛び交う様子も描かれている。またロランは槍が折れれば馬に乗ったまま名剣デュランダルで戦うし，またオリヴィエは先の折れた槍をそのまま使って馬上で戦う。『ロランの歌』(*Chanson de Roland,* 現存最古のオックスフォード写本は1100年ごろのもの) 前半ではもっぱら槍で敵を殺して落馬させる場面が多く描かれている。しかし同じ『ロランの歌』でも，前半部に後の時代になって付け加えられたと推定されている後半部では，二人が馬上で槍で戦った後に落馬して，つぎには地面に立って剣で戦うというパターンが，シャルルとバリガンの一騎討ち，そしてティエリーとピナベルの決闘に出てくる。『エネアス物語』(*Roman d'Enéas* 1160年ごろ) でのトゥルヌスとパルラスの戦いも同じである。

しかしその前提として，初期の武勲詩が文字に残されるようになった時，すでに戦闘がなによりも重装騎兵たる騎士の戦いとして考えられていたことも注目に値する。

『ロランの歌』のもとになったのは8世紀末にピレネー山中でシャルルマーニュの軍の後衛がバスク人ないしガスコーニュ人の攻撃を受けて壊滅させられた事件である。しかしシャルルマーニュの時代，軍編成では重装騎兵の精鋭部隊がその頂点に置かれていたものの，その主力は歩兵であり，まだ騎兵部隊が実戦において決定的な役割を果たすようなことはなかった[7]。また，そもそもピレネー山中という険しい地勢で重装騎兵どうしの華々しい集団戦などが行われたはずがない。しかし『ロランの歌』では「山は高く，谷は暗い」という文句は残しながらも，騎士どうしの戦いが語られる。さらに，『ロランの歌』ではフランス勢の敵は異教徒のサラセン勢となっているのだが，十字軍遠征で西欧の重装騎兵がイスラム軽騎兵の弓による攻撃に苦杯をなめていたにもかかわらず，そのサラセン勢がフランスの武将と同じ騎士として登場し，その戦いぶりはフランスの武将の場合と全く同じ表現で語られているのである。

西欧軍事史で騎兵軍の歩兵軍に対する最初の例として挙げられるのがヘイスティングスの戦い (1066年) であり，オックスフォード本『ロランの歌』よりも少し以前のことである。この戦いにおいてノルマン軍の主力は重装騎兵であったが，これに槍や弓を使う歩兵も補助の役割で付き従っていた。かのバイユーのタピスリー (1080年ごろ) はこの戦いを描いたものとしてよく知られているが，そこでも『ロランの歌』同様，戦いの主役として重装騎兵たる騎士の姿が数多く描かれている。

騎士の戦いを描くことは古代ものロマンについてもあてはまる。このジャンルの作品は，もとになるギリシア・ローマ古典期の作品のラテン語による翻案をさらにフランス語に直してで

きあがったものである。こうしてトロイア戦争やアレキサンダーの物語，テーバイ攻めの物語，あるいはウェルギリウスの物語の中に，中世騎士の戦いが描かれることになる。『エネアス物語』でのトゥルヌスとパルラスの戦いはその典型的な例である。ウェルギリウスの『アエネーイス』ではまずトゥルヌスが戦車からとびおり，二人は距離をおいて地面に立って対峙する。そしてパルラスが槍を投げるが命中せず，つぎにトゥルヌスが投げた槍でパルラスは胸を突き抜かれて絶命する。古代ローマ軍の主力は歩兵集団であったし，「古代の戦いではまず槍を投げてから剣を抜くのが常方であった」[8]。しかし，フランス語の作品では，二人の戦いは先に示したパターン通りに「互いに相手に向けて軍馬に拍車を当てる」ことから始まり，共に落馬して剣での戦いとなり，最後はトゥルヌスの剣の一撃にパルラスが倒れることになる[9]。ただし最後のエネアスとトゥルヌスの戦いの場面ではウェルギリウスに従って，逃げるトゥルヌスをエネアスが槍を投げて仕留めて終わるようになっており，まったく中世風に書き直されているわけではない。

さらにジョオフリー・オブマンモスのラテン語の『ブリタニア王列伝』(1140年ごろ）をもとにして書かれたワースの『ブリュ物語』(*Roman de Brut,* 1155年ごろ）についても同様である。大陸に渡りローマへ向かうアーサーの軍勢とこれを阻止するために進軍してきたローマ帝国軍の戦いでは，矢と槍が飛び交う中，両軍の武将たちはやはり馬に乗って戦っている。

中世騎士の戦法への書換えがフランス語作品によって一挙に生まれたとは言えないが，少なくともフランス語文学の歴史から見ると，戦闘が初めて描かれた時にはすでに戦いの主役は騎士であり，槍と剣で戦う一騎討ち描写のパターンも出来上がっていたのである。

2　槍による激突戦法

一騎討ち描写のパターンが初期武勲詩の時代にできあがっていたというものの，槍の使い方に関しては武勲詩や古代ものロマンは後の時代のロマンとは微妙な違いを見せる。中世騎士の戦法としてよく知られているのは，槍をほぼ水平に脇に抱えて全速力で馬を走らせ，槍先にこめられた人馬一体の衝撃力で相手の騎士なり，歩兵なりを倒す戦法である。この「中世の偉大なる技術的発明」(コンタミーヌ)が普及する以前，槍は肩から上に振り上げた腕につかんで投げたり，突き下ろしたり，あるいは肩より下から突き上げてつかうものであった。しかしこの新戦法の効力が認められるようになると，それに合わせて槍はより長く柄の頑丈で全体に重いものが使われるようになり，また相手に激突する際の衝撃に対して騎士の体を支えるために鞍の後背部は垂直に近い形のものになった[10]。そこで槍や鞍の発達からみて，だいたい11世紀の半ば以降からこの新戦法が普及し始めたと推定される。バイユーのタピスリーでは多くの騎士が戦闘に際して槍を高く振り上げているが，槍を脇に抱えている姿勢はわずかであるから，それほど早い時期からこの戦法が普及していたとは思えない。

新戦法の普及はパターン化した戦闘描写にどのように反映したのだろうか。この点に関して，『ロランの歌』の騎士の槍の使い方はすべてこの新戦法によっている，『ロランの歌』こそこの

新戦法を表現した現存する最初のテクストである，と指摘したのがロスである[11]。ロスはこれによってオックスフォード本『ロランの歌』のテクストが，まさにこの新戦法を知っていた改作者（remanieur）の手によって今日伝えられる形になったと主張した。

しかし，ロス自身認めているように，『ロランの歌』のテクストの表現じたいが大まかであって，新戦法の描写と断定させるものではない。例えばロランがアエルロートを倒す場面は次のようになっている。

Sun cheval brochet, laiset curre a esforz,
Vait le ferir li quens quanque il pout.
L'escut li freint e l'osberc li desclot,
Trenchet le piz, si li briset les os,
Tute l'eschine li desevret del dos,
Od sun espiet l'anme li getet fors,
Enpeint le ben, fait li brandir le cors,
Pleine sa hanste del cheval l'abat mort.
En doux meitiez li ad brisét le col;
自分の馬に拍車を当てて，全力で駆けさせ，
伯はあらん限りの力で相手に打ってかかる。
相手の楯を破り，鎖かたびらに穴を開け，
胸を開き，骨を砕いて，
背骨をそっくりそのまま背中から引き離すと，
槍で相手の魂を外に出し，
槍を力をこめて突き入れ，相手の体を振り回し，
槍の柄をいっぱいに遠く相手を馬から落として殺す。
相手の頸を真っ二つに折ったのだった。　（『ロランの歌』vv. 1197-1205）

ロスは槍の攻撃によって相手を落馬させること，また槍についた旗指しものもそのまま相手の体に突き入れていることを，この新しい戦法を描写したものとする根拠にしている。

ところで先に引用したリシュネルの図式の2番目の要素は「槍を振る」（Brandir la lance）となっており，この次に3番目の要素「打つ」（Frapper）が続いている。しかもこの2番目の要素は『ロランの歌』の戦闘描写には出てこないのである。この要素についてリシュネルが挙げているのは『ルイの戴冠』（*Couronnement de Louis*）などの例である。

Le cheval broche, les dous resnes li lasche;

Brandist la lance o l'enseigne de paile,
Fiert le paien sor la vermeille targe.
馬に拍車をあて，二本の手綱をゆるめると，
絹の旗のついた槍を振り，
異教徒の赤い盾をめがけて打ちかかる　(『ルイの戴冠』v.909-911)

この場合にはいかにも騎士が槍を振りかざして敵に迫っているように見える。また古代ものロマンでも同様で，『テーバイ物語』(*Roman de Thēbes*　1155ごろ）では，

l'espié brandist, point l'auferrant
et vet ferir Milon d'Arrabe,
un chevalier de grant parage.
l'escu li peçoia et fent,
le hauberc li ront et desment;
u cors li mist le gonfanon,
mort le trebuche de l'arçon, (v.4740-4748)
槍を振り，鋼色の馬に拍車を当て，
アラブのミロンに打ってかかった，
すぐれた家門のこの騎士に。
盾を砕き，割ると，
鎖かたびらを破ってばらばらにし，
相手の体に旗指しものを突き入れると，
殺して鞍からころげ落とした。　(『テーバイ物語』 v.4740-4748)

のように，「槍を振る」が「馬に拍車を当てる」の前に出てくる。『ロランの歌』では先に引用した箇所のように，brandir という動詞は負傷させた相手を馬から落とすために，「相手の体を振る」(brandir le corps) 場合か，あるいは剣を使った時に「一撃を振る」(brandir son coup) 場合に使われている。ロスは『ロランの歌』での brandir の意味については何も言っていないが，十字軍の記録を書いた歴史家たちの使った「vibrare lanceas すなわち brandir les lances という用語」は歴史家たちが古典作品の時代，槍が投げ槍として使われていた時代の用語をそのまま使ったのだと推定している。

そもそも，大まかで，しかも様式化している文学表現をもとにそこに描かれている動作の細かい点まで想像してこれと定めようとするのは意味のないことであろう。いみじくもロスが古典作家の用語が中世の作家たちにそのまま使われている可能性を指摘しているように，古典作

家の用語法，あるいは武勲詩が伝承される途上の古い時代の表現がそのまま残っていて，表現が時代に遅れているということも考えられる。確かなことは，初期の武勲詩やロマンの表現では槍を脇に抱えた新戦法の描写としては曖昧であるということである。

5 古代ものロマンの一騎討ち描写

本来は歌として朗誦されていた武勲詩のテクストは，母音押韻 (assonance) 10音綴詩句からなる詩節 (laisse) 形式に合わせて，リシュネルの指摘したような定型句表現が組み合わせて作られていた。構文は並列構文 (parataxe) が基本となっていて，一騎討ち描写も一つ一つの詩句が進むごとに戦いが展開していく。そして詩節ごとに一つの戦い，あるいは戦いの局面が語られる。典型的な例は『ロランの歌』の前半部，詩節ごとにフランス方の武将が一人ずつ敵のサラセンの武将を倒していくくだり（第93詩節から第104詩節まで）である。先に引用した，ロランがアエルロートを倒す場面はその最初の詩節である。語られている内容からすれば同じ描写が騎士たちの名をかえて続くが，詩節ごとに，韻の母音がかわると，それにあわせた定型句が連なることになる。敵方のサラセンの武将の名前あるいはその代わりの役名（l'amurafle, l'almaçur）がすべて詩句末に出てきているが，第93詩節の Aëlroth のように，12の詩節のうち8つの詩節で詩節冒頭の句に出てきている。詩節の最初の詩句末の敵将の名でその詩節の戦闘描写の調子が決まるようになっており，いかにも歌らしく，繰り返しと転調の妙が工夫されているのである。

8音綴平韻という韻文形式によってはじまったロマンではもはや詩節形式をとらないから，切れ目なく続く8音綴詩句の連続のうちに一騎討ちも描写されることになる。しかし，一騎討ち描写に関する限り，古代ものロマンの文体は武勲詩の文体とほとんど同じで，ただ詩句の音綴の数が違うだけであるように見える。先に激突戦法に関して『テーバイ物語』からひいた一騎討ち描写の例などは，実はそのまま全体でリシュネルの図式にあてはまるものである。エメは古代ものでもとりわけ『テーバイ物語』では武勲詩の定型句がそのままに現れることが多く，これに対して『エネアス物語』ではそれほどではないと言っている(12)。例えばトゥルヌスとパルラスの戦いを見てみよう。

l'un point vers l'autre lo destrier;
Pallas lo fiert parmi l'escu,
que tot li a frait et fendu,
et lo halberc li desmailla;
. . . . . .
Pallas lo fiert an l'elme amont,
treze des pierres qui i sont

e un cartier o tot l'esmal
li abatié jus contreval,
si qu'il en chancela trestoz;
par po qu'il ne cheï desoz.
互いに相手に向けて軍馬に拍車を当てた。
パルラスが相手の盾の真ん中を打つと,
相手の盾を破り砕き,
鎖かたびらを切り裂いた。
・・・・・・・・・・・・・・・
パルラスが相手の兜を上の方から（剣で）打つと,
そこにあった宝石を13個ばかりと
兜の四分の一ばかりをエナメル飾りともども
地面へ打ちおとしたが,
そのためトゥルヌスはよろめき,
あやうく倒れるところだった。　(『エネアス物語』v.5718-5738)

最後の〈si que ...〉や〈par po que ...〉といった従属節には並列構文の枠組みから外れて,もっと複雑な構文へと向かう試みがうかがえる。しかし,一騎討ち描写に関する限り,『エネアス物語』の文体も武勲詩と同じように見える。そのことはクレチヤン・ド・トロワ以下の韻文ロマンと比較した時にはっきりするだろう。

5　クレチヤン・ド・トロワ

アーサー王韻文ロマンの創始者がクレチヤン・ド・トロワとするならば,クレチヤンはまた韻文ロマンでの新しい戦闘描写の表現においても先駆者であった。ともすれば宮廷風恋愛（amour courtois）というテーマをロマンで展開させたことで重視されるクレチヤンであるが,その恋愛の基盤となっている騎士の世界を描くにあたり,彼は騎士の戦いの描写にも韻文作家としての才能を見せている。この点でフラピエは適切にも「戦闘を描く作家としてのクレチヤンに比肩しうるような武勲詩作家はほとんどいないであろう」と評している(13)。クレチヤンと言えどもすべての戦闘描写において工夫を凝らしたとは言いがたいが,クレチヤンが戦闘描写を軽視していなかったことは明らかである。彼のアーサー王ロマン第一作『エレックとエニッド』(*Erec et Enide* 1170ごろ）がそのことを証明している。まずエレックが「はいたかの集い」(fête de l'épervier）に参加する準備を整えるところで一つ一つの武具の名が挙げられる。そして「はいたかの集い」ではエレックとイデールの決闘が描写される。エレックとエニッドの結婚の祝いの後には二日にわたる騎馬槍試合の様子が語られる。後にエレックがエニッド

を連れて冒険の旅に出ると，三人，ついで五人の盗賊騎士の集団に襲われ，いずれもエレックは盗賊たちを撃退する。このようにさらに他の戦いも含めてさまざまなパターンの戦いの場面をクレチヤンは描いているのである。

クレチヤンでは槍による戦いが激突によるものであることがはっきりしてくる。エレックとイデールの決闘では「槍が折れ，鞍がこわれて落馬する」。

Cil plus d'un arpant s'antr'esloingnent,
por assanbler les chevax poignent;
as fers des lances se requierent,
par si grant vertu s'antre fierent
que li escu piercent et croissent,
les lances esclicent et froissent;
depiecent li arçon derriers,
guerpir lor estuet les estriés;
contre terre amedui se ruient,
li cheval par le chanp s'an fuient.
彼らは互いに１アルパン以上も離れると，
一戦を交えるべく馬に拍車を当てる。
槍の穂先で戦いを交えたが，
互いにすさまじい勢いで打ち合ったので
盾は穴があいて破れ
槍は粉々にとび散って砕け，
鞍わくが木っ端みじんになってしまい，
彼らは鐙から足を離さざるをえず，
二人とも地面に落ち，
馬は野を駆け去った。（『エレックとエニッド』v.865-874）

槍が折れることは，それほどの衝撃に耐えることの出来た頑健な肉体と，またその勇敢さのしるしとして名誉なことである。あるいはまた『荷車の騎士の物語』(*Roman du chevalier de la charette* 1177-1179ごろ)でのランスロとメレアガンの最初の戦いでは，二人が馬を走らせて激突したのであろう，双方の槍が砕け散ったのちに，「二頭の馬の額と額，胸と胸がぶつかり合い，両者の盾どうし，兜どうしがぶつかり合った」(v.3593-3596)と語られている。またさらにクレチヤン以来，突撃を開始するところで，「槍を槍立てに立てて」という文句がしばしば使われるようになる。

Quant il l'ot pris et montez fu,
par les enarmes prant l'escu
et met la lance sor lo fautre,
puis point li un ancontre l'autre
tant con cheval lor poeent randre.
彼がそれ（馬）を捕まえて乗り，
皮ひもを握って盾を構えて
槍を槍立てに立てると，
互いに相手に向かって馬に拍車を当てて走らせる，
馬が速く走ることのできるだけの速さで。（『荷車の騎士の物語』v.841-845）

槍が重く，片手では自由に振り回すことができないから，まず鞍の槍立てに槍を立てておいて，しかるべき時に水平に倒して相手に突きたてたことがわかる。ただしこの fautre という語が使われたのは，この例の場合のように，一騎討ち描写でたびたび使われる〈l'un, l'autre〉（「互いに」）表現の autre と韻を踏ませるのに好都合であったからだとも思われる(14)。

クレチヤンの戦闘描写は構文においても古代ものロマンよりも複雑になってくる。『エレックとエニッド』の例に〈par si grant vertu ... que ...〉の形があるように，〈molt ... que ...〉，〈tant ... que ...〉，あるいは〈tel ... que ...〉のように従属節が続く形が増えてくる。そして句跨がり（enjambement）も厭わない。

Erec a son talant le mainne,
et sache et tire, si que toz
les laz de son hiaume a deroz,
et si que devers lui l'ancline.
エレックは自分の思い通りに彼を引き回し，
引っ張り引きずったので，すべての
彼の兜の止め紐を切り，
自分の方に彼の体を傾けさせた。（『エレックとエニッド』v.5952-5955）

クレチヤンの表現の特徴はとりわけ細部の描写や比喩表現にある。剣の戦いの描写において，「相手に対して距離をつめる」（『荷車の騎士』v.2731）というような実際的な描写がしばしば出てくる。また槍での戦いについては，他にまず類のないほどめずらしい記述ではあるが，ランスロの「熟達の技の一つ」（une de ses teches）として「槍を突いて相手の盾を腕に押しつけ，それによってその腕を相手の脇腹に押しつけて落馬させる」（『荷車の騎士』v.5940-5944）など

という説明がある。こうしたテクニックがどれほど現実的なものであったのか，またどれほど人に知られていたのかはともかく，他の作品にはない特徴である。比喩表現も多様である。剣で「嵐のように相手を攻めたてる」(『荷車の騎士』v.2728) などというのは平凡であるが，「鷹に対しては長く持ちこたえることのできない雲雀のように相手に降参せざるを得なかった」(『荷車の騎士』v.2743-2745) となるとなかなかユニークである。とくに面白いのは打ち合いを金のやりとりにたとえて「相手が彼にくれるなら，彼の方もたっぷりお返しをする」(『エレック』v.948) とか「どんなに負け続けても賭金を二倍にして金を張る者よりも激しく打ち合った (『荷車の騎士』v.2703-2705)」といった，騎士の戦いを少し皮肉っているようにも見える表現が出てくることである。

このようにクレチヤンはパターン化し，単調になりがちな戦闘描写の表現において，むしろそれゆえにこそ，自らの作詩家(versificateur)としての力量を発揮することに努めている。クレチヤンに続く韻文作家たちも多かれ少なかれそのことを意識していた。例えばユー・ド・ロトランド (Hue de Rotelande) である。彼は戦闘描写に多くの詩句をあてている。全10578行の『イポメドン』(*Ipomedon* 1180年ごろ) ではラ・フィエールの結婚相手を決めるための三日間の騎馬試合が約2700行にわたって語られているし(v.3579-6296)，主人公イポメドンとレオナンとの一回の一騎討ちが320行ばかり (v.9535-9859) もかけて描写されている。そうした戦闘描写ではクレチヤンのような独特の比喩表現は見られないものの，修辞的技法による工夫が見られる。

Dur capleïz, dure asemblee,
Dure bataille, durs asauz,
Dure defense, durs enchauz,
Dure envaïe e durs les coups;
Quel d'eus ke ferge tost est sous,
Cist fiert celui e cil refert,
Cist quert celui, cil le requert,
激しい剣での打ち合い，激しい戦い，
激しい戦闘，激しい攻撃，
激しい守り，激しい攻め，
激しい攻撃，激しい打撃。
打てばすぐにそのお返しを見舞う，
こちらが打てば，あちらが打ち返し，
こちらが攻めれば，あちらが攻め返す，　(『イポメドン』v.9578-9584)

こうした同義語による対句表現，枚挙法のような基本的な技法そのものは，武勲詩にも，最初期のロマンにも出てくるし，当然クレチヤンも活用している。とりわけワースなどは合戦の全体の様子を描写する際にこうした技法を大いに活用した[15]。しかし一騎討ちを描写する8音綴詩句でこのように駆使されるのはめずらしい。「こちらが打てば，あちらが打ち返し」というのはクレチヤンの「むこうがエレックに打ちかかれば，エレックも打ち返す」(Cil fiert Erec, et Erec lui,『エレックとエニッド』v.968) を思わせるが，ここでは韻を踏む2行で連続して出てきており，さらに図式的である。

6　散文ロマン

韻文ロマンの流行の後，ロマンは散文でも書かれるようになり，それが『ランスロ』(1215-1225ごろ) のような長篇を生み，さらに『ランスロ』を含めた『ランスロ＝聖杯物語』のような作品群を形成するまでになる。この時代は現実の実戦において重装騎兵たる騎士の優位の時代であった。コンタミーヌによれば13世紀末においても，「騎士百人は歩兵千人にあたる」と広く信じられていたと言う[16]。

散文ロマンでは一つの作品の中で数多くの騎士が主人公として登場し，それだけ一騎討ちの場面も多くなる。一騎討ちの描写はしばしば短いものとなり，韻文作家においてはある程度まで表現に工夫の見られた戦闘描写は，散文ロマンでは一般的にまた単調なものになる。しかし，しばしば短い描写のうちに，槍による激突戦であることが端的に表現されている。

> lors commence Lancelos chevaliers a abatre et lances a briser et lors vint encontre lui.　I. chevaliers qui trop durement hurtoit qui avoit non Godez d'Oltre les Marches. Et Lancelos joste a lui, sel fiert et porte en un mont lui et le cheval ...　(そこでランスロは騎士たちを倒し，数々の槍を折り始めたが，そこへ彼に向かってゴデスなる一人の騎士がまことにすさまじい勢いでぶつかって来た。ランスロは彼と打ち合い，一撃を与えると，その騎士を馬と一緒に地面に落とし，　『ランスロ』XLII/7)

また槍の構えについて「腋の下」という言葉が出てくる。

> Lors commande Galehout que li cors soit sonés et tantost comme Lancelos l'entent, si met le glaive sos l'aissele et fiert le cheval des eprerons qui tost le porte, si se tient si joins en l'escu et vet si tost qu'il bruit tos.（そこでガレウトは角笛を鳴らすように命じ，ランスロは角笛の合図を耳にするやいなや，槍を腋の下に抱え，馬に拍車を当てると，馬はすさまじい速さでランスロを運んで行き，ランスロは盾の後ろでしっかり身を構え，すさまじい速さで進むために，大音響を立てた。『ランスロ』VIII/31)

散文ロマンの文体が単調であるのは戦闘描写に限ったことではない。リシュネルのやはり先駆的な『アーサーの死』の分析以来，韻文よりもむしろ散文の方が文体上の制約を多く受けることが指摘されている(17)。散文の戦闘描写の最初期のものとして『散文ペルスヴァル』(*Perceval en prose*) を見てみよう。

> Et Percevaus, qui petit prisa son dit et son beubant, li torna le cief de son ceval et s'entrevinrent de molt grand aleüre, comme cil qui nient ne s'entr'amoient. Et li cevaliers qui molt ot force et hardement fiert Perceval en l'escu si que il li fist fraindre et percier, et li fist le fer passer par selonc le senestre aissele, et bien saciés que s'il l'eüst pris en car que il l'eüst ocis. Et Percevaus qui molt estoit cevalerous li rapoia sa lance en l'escu par si grant mautalant que ainc haubercs ne escus ne cose que il eüst vestue ne li fu garans que il ne li fesist le fer sentir en le car (ペルスヴァルが彼の言葉と横柄な物言いを全く意に介せず，自分の馬の頭を彼の方に向けると，両者はすさまじい勢いで出会ったが，それはいかにも互いに少しも気に入らぬ相手どうしのようであった。力強く勇猛な相手の騎士がペルスヴァルの盾を打つと，盾を破って穴をあけ，槍の穂先をペルスヴァルの左の脇に沿って通したが，もし体に入っていたらペルスヴァルを殺していただろう。勇敢な騎士であったペルスヴァルの方も槍を相手の盾に凄まじい勢いで突き立てたので，鎖かたびらであれ，盾であれ，相手が何を身に着けていようと，生身に槍の穂先を感じさせずにはおかなかった。『散文ペルスヴァル』p. 212-213)

こうした散文の戦闘描写ではとりわけ散文の文体の特徴が明らかになる。文頭の et や si, lors の多用，〈si que ...〉や〈si ... que〉のような構文によって言葉をつないでいく文体であり，ほとんど継起する出来事を順番に語ってゆく。その間に入る文句と言えば,「力強く勇猛な騎士」とか,「勇敢な騎士であったペルスヴァル」などと型通りのものである。攻撃の凄まじさを強調するのに「どんなものをもってしても防ぎようがない」と防具の名を列挙するのは武勲詩や韻文ロマンス以来の常套句である。韻文としての制約のなくなった散文であるが，あくまでも戦闘描写の基本パターンに忠実であり，比喩や語彙に工夫するところがないだけにむしろ平板な描写となっている。

突撃戦法による圧倒的優位を誇った騎士軍団もやがて14世紀の初めごろからその実戦での地位を脅かされるようになる。それはこの攻撃に対する対策が進んだからである。たとえば歩兵集団は重装騎兵の槍よりさらに長い槍を構えて突撃を阻止しようとしたし，また地面にあらかじめ穴を掘って馬の動きをとめる工夫もされた。とりわけ重装騎兵の強敵となったのは組織された弓兵だった。すでに11世紀末以来の十字軍遠征において西欧の重装騎兵はイスラム軽騎兵

の弓による攻撃に対しては弱みをみせていた。西欧でも弓による攻撃が評価され，弓の性能が高められ，弓兵が効果的に組織されるようになると，重装騎兵は激突する前に倒されるようになった。その象徴的な例として挙げられるのがクールトレーの戦いである(1302年)。弓兵の攻撃に対して重装騎兵の方でも対策が講じられる。それまでの鎖かたびらは鋼板で補強され，手足の防具も発達し，盾が不要となる。馬の防具も発達する。15世紀になると体をすっぽりと包む板金鎧が普及するようになる。しかしその防具の重さのために重装騎兵は体を自由に動かすことができなくなり，ますます集団戦での重装騎兵の部隊の地位は低下する。

しかしすでに社会的地位と威光を得ていた騎士は重装騎兵たることに固執した。だからこそ実戦的であった騎馬槍試合が遊戯的なものに変質しながら人気を保った。盾と槍が工夫されて危険の低減化が図られ，また集団戦の前に行われる個人戦がより重視されるようになった。もちろんその個人戦とは槍を脇に抱えての激突であった。戦闘は騎馬槍試合において虚構化したのである。

13世紀に長大な作品を生み出した散文ロマンの戦闘描写は15世紀に書かれた散文ロマンにもほとんどそのままの形で受け継がれて行く。中世末期には13世紀の散文ロマンが手写本によって普及し，また武勲詩や韻文ロマンが散文に改作されて読まれていた。そうした中で新たに書かれた散文ロマンの一騎討ちの描写は前の時代のものの模倣でしなかった。フランスのエステュール伯の息子クレリアデュスがイギリス国王フィリップの宮廷で活躍する物語『クレリアデュスとメリアディス』(*Cleriadus et Meliadice* 1435-1445ごろ) は物語の舞台としてはランスロやペルスヴァルの活躍するアーサー王の宮廷よりは現実的な世界であるが，一騎討ち描写はアーサ王散文ロマンの特徴をそのまま継承している。

> Les deux chevaliers furent pres de courre sus l'un à l'autre si brochent les chevaulx des eperons, leurs lances en leur poing. Les chevaulx furent vistes et ligiers et coururent tost. Les chevaliers furent fors et puissans et rencontre l'un l'autre et tellement que ilz brisserent leurs lances qui estoient grosses et fortes. Les coups furent si grans que les chevaulx ne les peurent endurer que il ne leur convenist cheoir à terre atout leurs maistres. Et Cleriadus fut fort et ligier si saillit tantost à terre et laissa son cheval relever, ... Les deux chevaliers se combatent fort et, par grant vigueur, se entredonnent de grans coups sur leurs heaulmes et haubers et partout là où ils peuent actaindre de leurs espees qui estoient clers et bien tranchans et souvent les font sentir jusques à la char l'un l'autre. ... il [Cleriadus] donne de son espee tel coup au costé au chevalier que il lui rompit troys costes ou ventre et n'y eust haubert ny armes qui l'en peust garder que il ne lui fist une telle plaie que à paine lui veoit on tous les boyaulx. (二人の騎士はすぐにも相手にむかって駆け出す準備が整うと，

槍を握って，馬に拍車をかけた。馬は素早く軽やかで，勢いよく駆けた。騎士たちは力強くたくましく，出会うと，その勢いで太く頑丈な槍を折ってしまった。衝撃の強さのあまり馬はそれに耐えられず，乗っている主人もろとも地面に倒れることを余儀なくされた。クレリアデュスはたくましく身軽であったのですぐさま地面から立ち上がり，馬が身を起こすのを放っておいた．．．二人の騎士は力強く戦った，そしてすさまじい勢いで，輝く鋭利な剣でもって，兜や鎖かたびらや，狙えるところをいたるところ目がけて激しく打ち合い，互いに相手の生身に剣の一撃を思い知らせた。．．．彼が相手の騎士の脇腹に一撃を与えると，その一撃は相手のあばら骨を三本破ったのであり，どんな鎖かたびら，武具にせよ，内蔵がほとんど丸見えになるほどのこうした傷を与えられることからその騎士を守ることはできなかったであろう。(『クレリアデュスとメリアディス』IV, 326-386)

『ランスロ』の文体に比較すれば，文頭の si, et, lors などの使用が少なくなり，それに代わって〈si ... que ...〉や〈tel ... que ... 〉のような構文によって文を長く続けていく傾向がうかがえる。しかし，戦闘描写のパターンには忠実である。衝突の激しさが強調され，騎士，槍，剣については常套的な形容がつき，また一撃のすさまじさを語るには相も変わらず「どんな武具でも防げない」となる。15世紀となれば板金鎧の普及していた時代である。しかしここでは相変わらず鎖かたびら (haubert) の騎士が登場するのである。しかも，また別の場面では「クレリアデュス殿は頭に兜をつけ，槍を槍止めに当てると」(messire Cleriadus mect son heaulme en sa teste et sa lance VIII, 68-69) というように，一方ではやはり前の時代の兜を指す語 heaume が使われながら，他方では板金鎧の右胸につけられるようになった槍止め (arrest) がでてくる。

同じ物語でも Jean le Meingre(1366-1421) の伝記物語である『ブシコー元帥の事蹟の書』(*Livre des fais de Bouciquaut* 1406-1409ごろ) はもっと現実的である。そこではすぐれた騎士となるための訓練が箇条書きに記されていて，その中には武具 (harnois) をつけたままで槌や斧を振り続けて体を動かすことを覚え，腕や手を鍛えるとか，あるいは槍投げや乗馬の練習をしたとか述べられている。ここではもはや「鎖かたびら」の語は出て来ない。ブシコーの初手柄はフラマン人との戦争での活躍である。初々しいブシコーは一人のフラマン人を相手にまず戦斧で立ち向かい，それが叩き落とされると短剣 (dague) を引き抜いて相手を倒す。短剣は14世紀になって使われるようになったものである。そしてガスコーニュの騎士との決闘では槍による激突が何度も槍を新しいものに取り替えて繰り返される。

La tierce fois poignirent l'un contre l'autre; il assena messire Bouciquaut si que la lance volla en piece [s] et l'eschine lui fist plaier; mais il rassena telement lui qu'il

n'ot si bon harnois qu'il ne lui fichast la lance par entre les costez, et le porta par terre si que on cuidoit que il fust mort. (両者が互いに馬に拍車を当てること三度目である。相手はブシコー殿に打ちかかり，自分の槍は粉々に飛び散り，ブシコー殿の背を反らせた。しかしブシコー殿の方も見事に相手に打ちかかったので，たとえどんなにすぐれた武具であってもブシコー殿が相手の肋骨の間に槍を打ち込むのを防ぐことはできなかったであろう，相手を地面に落とすと，相手は死んだように見えた。『ブシコー元帥の事蹟の書』I, XIV)

こうした激突が20回以上も繰り返され，負傷した相手が戦うことができなくなったところで決闘が終わる。ここでの決闘はもはや槍での戦いの後に剣の戦いという形をとらず，あくまでも槍による激突が続けられる。それは当時の騎馬槍試合が槍での個人戦中心になったのと一致している。しかしここにあげた槍での戦いの描写が，「たとえどんなにすぐれた武具であっても防ぐことができない」というような型通りの文句に見られるように，戦闘描写の基本的なパターンに従っていることも事実である。

武勲詩においてすでにできあがっていた戦闘描写のパターンはある程度までその後の韻文ロマン，散文ロマンを通して中世末期にまで引き継がれていく。基本的にはいつも同じ要素の組み合わせ，しかも単純な図式の戦闘描写が繰り返された。しかし詳しく見れば，その経過において，槍による激突という新しい戦法が現実に遅れてパターンの中に組み込まれていったことが分かるし，また韻文作品においてはそのパターンの枠組みの中で表現に工夫がこらされたことがわかる。13世紀には現実の騎士はまだ実戦においての主役であり，また騎士道というイデオロギーの下である種の理想的人間像として考えられる存在であった。おそらくそれゆえにこそ散文ロマンの作者たちは騎士の戦闘の描写においても文学的伝統に忠実であった。そしてその伝統は実戦において騎士優位の時代が終わった14，15世紀にも受け継がれる。実際，現実においても騎馬槍試合において実際の戦闘の虚構化ともいえるものが進行していた。本来は実戦さながらの戦いであったものが，個人的でもっと安全なスポーツに変質していたのである。中世末期のロマンの戦闘描写はむしろこの虚構化した戦闘である騎馬槍試合を描いたものであったといえるし，また騎馬槍試合の方もロマンを模倣して，円卓の騎士による戦いなどというものを催していたのである。さまざまな作品の戦闘描写のもっと詳細な比較を進めれば，こうした現実と文学伝統との複雑な関係はもとより，ジャンルの違いや作品ごとの文体の違い，文体の伝承関係もさらに詳しく明らかになろう。

注

本稿でとりあげた作品について参照した刊本は以下の通り。

-*La Chanson de Roland*: Ed. Gérard Moignet, Paris, Bordas, 1969.
-*Le Roman de Thèbes*: Ed. Guy Raynaud de Lage, 2 vols., C.F.M.A., Paris, Ch ampion, 1991.
-*Le Roman d'Enéas*: Ed. J.-J. Salverda de Grave, 2 vols., C.F.M.A., Paris, Champion, 1985.
-Chrétien de Troyes, *Erec et Enide*: Ed. Mario Roques, C.F.M.A., Paris Champion, 1978.
-Chrétien de Troyes, *Le Chevalier de la charrette*: Ed. Mario Roques, C.F.M.A., Paris Champion, 1978.
-Hue de Rotelande, *Ipomedon*: Ed. A.J.Holden, Paris, Klincksieck, 1979.
-*Lancelot*: Ed. Alexandre Micha, 9 vols., T.L.F., Genève, Droz, 1978-1983.
-*Perceval en prose*: Ed. Bernard Cerquiglini (Robert de Boron, *Le Roman du Graal*), 10/18, Paris, U.G.E., 1981.
-*Cleriadus et Meliadice*: Ed. Gaston Zink, T.L.F., Paris-Genève, Droz, 1984.
-*Le Livre des fais de Bouciquaut*: Ed. Denis Lalande, T.L.F., Paris-Genève, Droz, 1985.

(1) 韻文アーサー王ロマンでの騎士の戦闘の種類についてはシェヌリが整理している。Chênerie (Marie-Luce), *Le chevalier errant dans les romans arthuriens en vers des XIIe et XIIIe siècles,* Genève, Droz, 1986, p.277-299.

(2) レノー・ド・ラージュは,『テーバイ物語』の作者には戦場での経験があったのではないかと推測している。Raynaud de Lage (Guy), "Les romans antiques et la représentation de l'antiquité", *Le Moyen Age,* LXVII, 1961, p.247-291.

(3) Rychner (Jean), *La chanson de geste, essai sur l'art épique des jongleurs,* Genève, Droz, 1955.

(4) Micha (Alexandre), *Essais sur le cycle du Lancelot-Graal,* Genève, Droz, 1987.

(5) Rychner, *op. cit.,* p.140.

(6) Micha, *op. cit.,* p.228-234.

(7) 武器・防具・戦争などの歴史については以下のものを参考にした。
Contamine (Philippe), *La guerre au Moyen Age,* 3e éd., Paris, P.U.F., 1992.
Ed. Strayer (Joseph R.), *The Dictionary of the Middle Ages,* 13 vols., Charles Scribner's Sons, New York, 1982-1989. (〈Arms and Armor〉, 〈Cavalry, European〉, 〈Chivalry〉, 〈Games and Pastimes〉, 〈Lance〉 の各項目)
木村尚三郎編『中世と騎士の戦争』(「世界の戦争」5), 講談社, 1985.
加茂儀一『騎行・車行の歴史』, 法政大学出版局, 1981.

(8) 『アエネーイス』, 第10巻. 泉井久之助訳『アエネーイス』, 岩波文庫, 下巻, 1976年, p.193, 訳注.

(9) レノー・ド・ラージュは, 風俗なども含めた一般的な古代についての知識と言う点で, 古代ものロマンの作者のうちでは,『エネアス物語』の作者が最も正確に知っていたと指摘している。軍事面については, 一方で戦車 (中世には使われなかった) への言及があり, 他方では槍的 (中世の騎士が騎乗で槍を使う練習に使われた)への言及があり, またヴォルカヌスの鍛えた剣の柄頭に聖遺物が埋め込まれているなどという古代と中世の混淆があることなどを指摘しているが, 戦闘の方法については, もともと古代も中世もあまり変わりはないと言うにとどまっている。Raynaud de Lage, *op. cit.*

(10) Contamine, *op. cit.,* p.320.

(11) Ross (D.J.A.), "L'originalité de Turoldus: le maniement de la lance", *Cahiers de Civilisation Médiévale,* Tome 6, 1963, pp.127-138.

(12) Petit (Aimé), *Naissance du roman, les techniques littéraires dans les romans antiques du XIIe siècle,* Champion-Slatkine, Paris-Genève, 1985, p.296-309.

(13) Frappier (Jean), *Etude sur Yvain ou le chevalier au lion de Chrétien de Troyes,* Paris, SEDES, 1969, p.238-242.

(14) ‹fautre›は鞍についているものであるが，ゴドフロワの古フランス語辞典では，後の時代の板金鎧の右胸につけられるようになった槍止め (arrest) と混同されている。cf. Noé (A.C.von), "Lance sur fautre", *Modern Philology,* I, 1903-1904, p.295-301, 395.

(15) たとえば次のようなくだり L'une eschiele l'autre envaïr, / L'un cunrei a l'altre hurter, / Les uns ferir, les uns buter, / Les uns venir, les uns turner, / Les uns chaeir, les uns ester, / Hanstes brisier, retrois voler, / Traire espees, escuz lever, / Les forz les feibles craventer, / Les vifs les muranz defuler; (戦列は互いに攻めあい, / 部隊は互いにぶつかりあい, / 打ちかかる者あれば, 突きかかる者あり, / 攻め寄せる者あれば，回りこむ者あり, / 倒れる者あれば，勝ち残る者あり, / 槍の柄を折り，折れた柄を飛び散らし, / 剣を抜き，盾をかかげ, / 強き者たちが，弱き者たちを打ち倒し, / 命ある者たちが，死にゆく者たちを踏みつける。*Roman de Brut,* Ed. Arnold, 2 vols., SATF, 1938-1940, v.12564-12574)

(16) Contamine, *op. cit.,* p.159-160.

(17) Rychner (Jean), *L'articulation des phrases narratives dans la Mort Artu,* Genève, Droz, 1970.